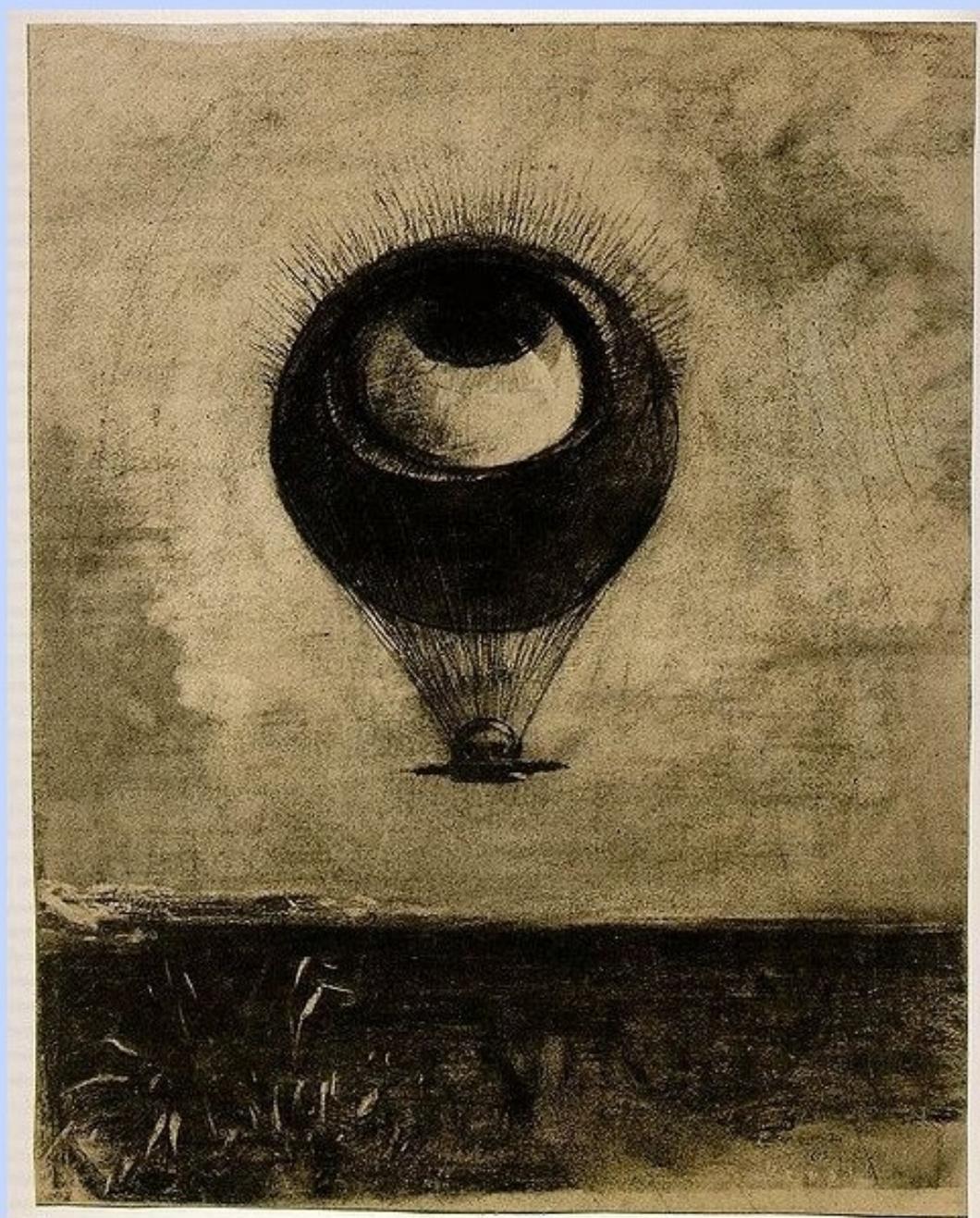


眼球宇宙



夢遊星人

くるえるストーリーズ

眼球宇宙

夢遊星人 作

1、目にあまるこぶし

発端は例の防衛本能というやつだったらしい。

「おまえ、生意気だぞ！」

何かの遊びの最中に、よく理由もなく欽太を殴る兄の堅一が、ふいにこぶしを突きだしてきた。よける暇（いとま）もなかった。兄のこぶしは、この頃本格的な喧嘩をおぼえたらしい、なかなかしたたかなインパクトがあった。堅一は欽太の出目がことのほか目障りらしく、欽太がおずおずと見上げただけでも、時にはそのこぶしが目に入ってきた。欽太は口惜しいのと、物理的刺戟との両方で、やたら涙を流して、自分の机の下にもぐりこむのだった。

そんな女みたくないじけた仕草が、いよいよ堅一の加虐性を増すようだった。欽太が口応えしたり、少しでも出しゃ張ったりすると、うむをいわさずこぶしが目に飛んできた。右利きの堅一だから、たいてい左目へ飛んできたが、時には趣向を変えて、正面から左右等分に来たり、ギツチョでわざわざ右目をねらう時もあった。こんなに目ばかり殴られていたら、今に盲目になってしまうだろう——欽太は本気になって心配した。そして、殴られるたびに、欽太の出目はいよいよひどくなって行くようだった。

両親も、欽太の迫害を見て見ぬふりをした。時には、欽太が駄々をこねたりすると、母親は堅一を呼んで欽太を黙らせた。堅一の名が母親の口唇にうかびかけると、欽太は悪魔の名でも聞かされるように身内がずっと冷えて、小さきみな身震いさえ覚えた。この家では、もう誰にも頭が上がらなくなってしまった。妹も、欽太がちよっこづいたりすると、すぐ堅一につげ口に行く。たちまちポカポカと殴られる。

この頃は殴られる前から観念して、両目を掌でおおうようになった。それが憎らしくて、堅一のこぶしは雨あられと頭にふってくる。——こんなに兄弟仲が悪いのは、きっとおいらは橋の下で拾われた棄て子なのだろう。欽太はいつか、堅くそう信じるようになった。

だが今は、掌でおおうにも、あまりにふいの攻撃だった。欽太は殴られるという恐怖感が生じると、一瞬身動きが出来なくなるたちだった。だから、かわせばかわせる場合でも、かわした場合の相手のいっそうの激怒を予想して、硬直状態に陥ってしまうのだ。逃げもせず、抵抗もせず、ただ相手の殴るに身をまかせている。そして最後に、痛みよりも、そういう自分の惨めさにたえられなくなると、女の子のようにヒイヒイ泣きだすのである。

今も欽太は、直感的に殴られるとひらめいたとたんに、意志が麻痺してしまい、堅一のコぶしが飛んでくるのをスローモーでも見るように、恐怖の念にちぢみながら、凝っと目の中にとらえていた。――いつもよりずいぶん時間がかかるな。頭の片隅でこんなことを考えるほど、堅一のコぶしは日常化してしまった。――もう少し来たら目を閉じないといけないな。

だが、コぶしがぐんぐん近づいて来ても、欽太の目蓋は閉じようとしなかった。閉じようとしなかったばかりか、それでなくてもグリグリした欽太の出目は、目蓋の隙間にあきたらず、目いっぱい跳びだそうとし、やってくる異物を歓迎しかねまじき張り切りようだった。――何をとちぐるって、おいらの眼球は自然に反逆しようというのだろう。あらゆる条件反射、不随意筋の活動は、目の保護へ向かって働くものなのに。中学二年の欽太は、科学好きな少年だったので、つい科学的にものを考えてしまうのだった。

欽太は目を意志的に閉じようとした。しかし、ねらわれている左目も、右目も、目蓋が驚きのまま張りついたように、言うことを聞かなかった。――だめだ、おいらは盲目になっちゃう！ 欽太は恐怖と悲しみのミックスした感情の波立ちの中に、文字どおり凍りついていた。ただ目だけが、特に左目が、ポップしそうに前へのめり出ていた。そこへ、拡大写真のようにコぶしが入って来た。欽太は目を閉じた。いや、閉じられなかった。閉じたような心理的錯覚だった。目は開いたままだった。

それは奇妙な感覚だった。映画の画面から、まっしぐらに突進してくる車が、自分を轢いていったと錯覚するような、そういう錯覚だった。衝突の瞬間、体中で予期していた衝撃を、ふとかわされて、車はどこかへ消えてしまう。少なくとも、もはや自分の方へは向かっていない。

要するに、堅一のコぶしは欽太の左目に衝突しなかったのである。では、そのコぶしはどうなったのか。堅一の気が変わって、そのコぶしを直前で引っこめたのであるか。だが、目の前から消えたのは、コぶしばかりでなく、コぶしの持ち主も同様だった。堅一のコぶしも、堅一も消えていた……。

欽太は呆気にとられて目をこすった（とたいてい表現するが、これは文字通りではない）。目はもと通りにまばたきした。何度見ても、たった今日の前にはいたはずの堅一の姿は消えている。夢でも見たのだろうか。あまり堅一に殴られてばかりいるので、欽太の見る夢まで被虐的になって、夢の中で殴られそうになった途端に目が覚めたものと見える。だが、その説明では、どうも十分に納得できなかった。

欽太は茫然とした心の片隅で、これは夢であってほしくないと言いたく声を聞いた。堅一は消えたのだ！ 自分の敵はどんな原因であれ、この世から失踪したのだ。これが嬉しくないことがある

うか。もし本当だとすれば、これほどの幸運があろうか！ 欽太はだんだん快活になってきた。この世にだれ一人恐れる者がいなくなったような、極端な幸福感にともすればおちいりそうになった。――ようし、これからは思い切り、妹のやつを苛められるぞ。ざまあ見やがれ。だが、ふとわれに返り、すべてが夢だった場合、恐ろしい報復が見舞ってきそうで、思わず身震いした。

2、目の中の電信柱

堅一は晩の食事にも姿を見せなかった。親は心配しだした。堅一の友達の家へ一軒一軒電話し、あげくは鞆が家に置かれていたにも拘らず、高校へまで問い合わせた。その晩、堅一は到頭姿を見せなかった。その翌日も、またその翌日も……。堅一は完全に失踪してしまった。家中で、悲しまないのは欽太だけだった。自分だけは兄の消失の秘密を知っているのだから、心中ほくそ笑んでいた。だが、極端に嬉し顔を見せると、腹の中を勘ぐられそうで、家族の中では沈んだ顔をして見せた。

一番悲嘆にくれたのは、妹のトン子だった。いつもこましゃくれた面で、欽太を鼻先であしらうトン子は、保護者を失った今、妙に欽太に遠慮しだしていた。陰険だが気の弱い母親も、子供たちには無関心の父親も、トン子のあてには出来そうにない。今いなくなって考えて見ると、堅一は高校生ではあったが、いつの間にか一家の父親ぐらいの権威とにらみを利かせるようになっていたのだ。

一ヶ月もすると、堅一の不在は一家の日常生活の中で、諦めにつつまれて確立されていった。欽太はもはや兄の帰還を恐れなかった。目の上のたん瘤であった堅一がいなくなってみると、欽太は自分が意外に癩癩持ちで、わがままで、“手が早い”ことに気づいた。いつのまにか、欽太は堅一の真似をしていたのだ。そしてかつての殉難者、欽太に代わる者は、妹のトン子だった。

気分がむしゃくしゃする時、そばに妹がいると、わけもなくその横面を張った。その肉づきの好い頬が、叩いてほしいと訴えているように、妙に誘惑的だった。トン子はワッと泣いて、母親のところへ駈けていった。

母親は白い目でにらむだけだった。威圧を要する時には、いつも堅一の手をかりて来たので、母親は欽太とさし向かいでは、何も言えなくなっていた。あえて言うと、欽太は母親にかまわず、トン子を叩きつづけるのだった。母親の一言が一打に当たった。

父親に告げ口しても、父親は堅一に遠慮したように、欽太にも妙に遠慮した。父親は息子たちと同じ、克服できない病の虜だったからだ。堅一がある日はむかうまで、父親はワイフビーティングを趣味にしていた。それ以来、家では温和しくなってしまった。

欽太は堅一の消失した事件を、あまり深くは考えなかった。きっと天罰が下って、あちらの世界の住人に抹殺されたのにちがいない。学校では、欽太は大人しい少年だった。ずう体は普通な

みだったが、人一倍気が小さいので、人の機嫌を取ってばかりいた。それで、いつの間にか気が鬱屈していた。家に帰ると、それを弱い者に対して発散させた。

今も帰り道、欽太は家へ帰ったら、妹のやつをどうやって苛めようか、そんなサディスティックな空想にわれを忘れていた。そして、うつ向き加減に歩いていたので、知らずに木の電信柱と衝突していた。はっ！と思った途端に、欽太は電信柱を通りぬけていた・・・というのは正しくない。電信柱は消えていたのだから。

欽太はきよろきよろあたりを見回した。たった今日の前にあり、額の先まで迫っていた電信柱は、どこにも立っていない。堅一のげんこの時のように、目の直前まで来て消えてしまった。道の先の電信柱を見ると、途中で断たれた電線が、まだ揺れながら垂れ下がっている。後ろの電柱も同じありさまだった。この一本分の電柱は、どこへ消えたのだろうか？

欽太は思い当たることがあった。急いで家へ帰り、人の目のないのを見すまして、母親の鏡台の前に坐った。出目金のそれのような自分の両眼が、鏡の底に沈んでいた。欽太は数瞬の間、魅せられたように、おのれのまなこと、にらめっくらをした。

それからこわごわ、左目を鏡に近づけた。茶色がかった虹彩の中に、ポツリと瞳孔が浮かんでいた。瞳の上には、鏡をのぞいている欽太の目に映っている、部屋内の様子が、小さく反射していた。その反射像の更に下の、瞳の奥の暗がりを凝っと覗きこむと、欽太の探していたものが浮かびあがってきた。目の中のうつばりならぬ、電柱が、小さく映っていた。――やっぱり・・・。欽太は原因を発見してしまうと、たとえ災いがおのれにふりかかっても、原因を知ることで安堵できる科学者のように、安堵の息をついた。

電信柱は左右両目に映っていた。欽太はちょっと考えた。眼の中へ入ることによって、電信柱は二つに分裂したのだろうか。右に映ったものも、左に映ったものも、どちらも同じ形、同じ様子をしていた。同じものを、別の覗き口から、同時に覗いている――そうにちがいない、欽太は推理した。左右二つの目は、瞳の奥底で一つの世界に合流しているのだろうか。電柱はそこに移されて、立っているのだ。だが、堅一は・・・。やはり欽太の目の中のどこかにいるにちがいない。

その時、電信柱の根もとに黒い影が現われた。猿のようにするすると、電柱を登っていく。てっぺんの横桁に達すると、欽太の方を向いて、狂ったように手を振った。小さくて、よく見えなかったが、きっと何かを叫んでいるにちがいない。口をぱくぱくさせているようだった。

欽太は鏡から目をそらした。ニタリと笑みがこぼれた。神様は暴君に、何という皮肉な罰を下したもうたことだろう――翻訳すれば、そんなふうな意味の笑みだった。そして、今度は目をそらさずに鏡に向けて、その悪魔的な笑いを放った。瞳の奥で、鏡に映った欽太のほくそ笑みを、苦々しく見ているにちがいない、兄の堅一に向かって。

堅一はしかし、必死に手を振ることをやめなかった。恐怖のあまり、プライドも何も失ってしまったのかもしれない。欽太は堅一の像の前に目蓋を下ろした。どこか目の中の暗闇の世界に、電信柱によじ登った堅一は、漂っているにちがいない。妙に目蓋の裏がむずがゆい想像だった

ふたたび目をあけた。電柱とその上の影は、まだ映っている。目を開けた途端に、影はまたしきりと手を振りだした。——うるさいな。金太は鏡台の引き出しから、目薬を取りだした。左目にさすと、薬液は角膜上に広がらず、抵抗もなく瞳の中へ落ちこんでいった。鏡を見ると、電柱も堅一も、きれいさっぱり洗い流されていた……。

3、目は口ほどにものを……

欽太はすっかり自信家になった。この世に恐れるものは、何一つないような気がした。なにしろ、物語によくある〈イーヴル・アイ（邪視）〉の持ち主になったのだから。自分の気に入らない人物、物体は、片っ端から“眼球の世界”へ抛りこめばよい。

実験で確かめたところ、欽太の邪視は、左目に限られていた。左目だけが、異次元への出入り口（今のところ入り口だけだが）となっていて、右目はただ、鏡の役割を果たしているだけらしい。左目をつぶると、右目の像も消えたが、右目をつぶっても、左目の像は残っている。左目を集中的に殴られたことで、そこに突然異世界への扉が開かれたらしい。

電信柱とそれにしがみついた堅一とは、たびたび瞳孔の奥へ戻って来た。そのたびに目薬を垂らす。すると電柱は薬液の上に浮かび、それを丸木舟にして、堅一はふたたび漕ぎ返すらしい。——やっかいなことだ。

欽太は眼帯をすることにした。それは時として、うっかり物を目の中へ落としてしまうからだ。物が近づくと、左目はまばたきをするどころか、かっとまなこを見開き、大小形態を問わず、どんなものでも呑みこんでしまう。鉛筆、教科書、欽太の顔をなめた隣家の犬、等々。それに、うっかりすると、自分の手まで突っこんでしまいそうだった。もし、そうなったら、どうなるだろう。欽太の邪視は、“ゲシュタルト（全体的形態）”ごと丸呑みするくせがあるので、そうなったら欽太自身、おのれの眼球に呑みこまれてしまうことになる……。

眼帯の下で、目蓋は大人しく閉じていた。少なくとも、薄目の状態にいる時は安全だった。それでも時に、眼帯がふいに消えてなくなるので、たまたまクラスメートが傍にいる時は、欽太は手品のふりをして、予備の眼帯をポケットから取りだした。

欽太は“仕返し”に取りかかった。いつも欽太をいびることを楽しみにしている、クラスのワルの一人を、校舎の裏におびきだした。欽太は大胆になっていた。ポルノ写真を見せると言って、ポケットから出した手で、欽太は相手の頬を叩いた。——野郎！ 熊のように唸って、クラスメートはこぶしをふり回した。欽太は待ってましたとばかりに、自分の顔を、正確には眼帯をはずした左目を、突きだした。こぶしは何の抵抗もなく瞳の中をすり抜け、本体がその後につづいた。一瞬ののちには、相手の姿はなかった。少なくとも、欽太の目の“前”には……。

こういう調子で、幾人かを片づけた。電信柱にすがって助けを求める影は、日一日と増していった。ある日は、欽太の顔を見ると、難ぐせをつけて殴りたがる、理科の陰険な教師を、皆の見える前で消してしまった。呆気にとられている皆にまじって、欽太も呆気にとられたふりをしていた。家に帰って、その教師をさんざん目薬で溺れさせた。

またある時は、欽太はあまりに自信過剰が昂じて、ダンプカーが走ってくる道を、わざとゆっくり渡った。ものすごいブレーキの音がした。欽太も一瞬、骨を凍らせて立ちすくんだ。眼帯を外すのを忘れていた。ダンプカーは彼をはね飛ばす直前で止まった。罵声が運転席から降ってきた。欽太は今や、侮辱には相手が誰であっても耐えられなかった。

欽太は横へ回って、運転台の扉をこぶしで叩いた。――このガキ！ ふざけやがって！ 刺青のお兄さんが血相変えて跳び下りると、欽太の胸ぐらをつかんだ。――<さあ、殴ってくれ> 欽太は眼帯を外した。途端に、意気のいい運転手の顔色がさっと変わった。欽太の目の中に何を見たのかは知らない。胸ぐらをつかんだ手を離すと、気味悪そうな目つきをして、運転台に逃げるように這いのぼった。やけに大きな音をさせて、ダンプを発車させた。

欽太は勝利に酔っていた。もう世の中に恐れるものなんて、何一つありはしない。欽太は夜も眼帯をして寝た。するとある晩、妹に揺り起こされた。欽太はクラスメートに自信を持った時から、妹を苛めなくなっていた。トン子のような、取るに足りない存在にかまうのは、欽太のプライドが許さなくなった。で、妹に揺り起こされた時も、いつものように不機嫌な罵声を発することをしなかった。ただ眠さのあまり、つい目をこすりそうになって、はっとした。眼帯が外れていた。あわてて布団の上を探した。どこにも落ちていない。

「欽兄ちゃんの探してるの、これでしょう」

トン子が得意そうに言った。

「あっ！ おまえ眠ってる間に取ったな」

欽太はひっぱたこうとした。トン子はひるまない。眼帯を持った手を背に回して、胸をそらせている。

「おまえ、そんないたずらをして、あとでどんな目に合うか分かってるんだな」

欽太は力づくで奪い返すのも、今の自分には“大人げない”気がして、妙な説得調でトン子に話しかけた。

トン子はふてくされていた。今にも泣き出しそうな空模様だった。欽太は、トン子がこんなまねをする理由が解せなかった。自分にふざけてくるほどの兄妹仲ではない。とって、このところ、トン子を特に苛めたわけでもない。眠りの途中で起こされたために、何か重大なことを忘れているのかな、と頭の晴れるのを待った。すると、トン子が半泣き声でびっくりすることを言った。

「堅兄ちゃんを返してよ！ あたい、知ってるんだから・・・堅兄ちゃんを返して！」

トン子はわれを忘れて、欽太にむしゃぶりついてきた。

「ばか！何を言ってるんだ！」

欽太は平手打ちをくらわせた。トン子は顔を布団につけて、ワッと泣いた。隣の部屋で親たちが目を覚ましたらしい気配だ。しきりの襖がずっと開いて、母親が姿を現わした。欽太をにらみ、トン子を起こして、自分の布団へ連れていった。

欽太は傍に落ちている眼帯をひろって、左目につけた。——チェッ！あんな兄貴のどこが好いのかな。考えてみれば、欽太は人から好かれた覚えがなかったが、兄貴は誰からも好かれるたちらしい。——おいら以外の誰からもな……。欽太はあらためて烈しい嫉妬を覚えた。——絶対出してやるもんか、絶対にな。もっとも、自分でも出し方が分かっているわけではなかったが……。

4、いとめでし人

欽太は、小学校の頃から、ひそかに憧れていたクラスメートがいた。クラス替えの時には、一緒にクラスになるようにと、いつも祈ったものだが、中学校へ入って、やっとその願いがかなった。かなったといっても、もっぱら欽太が心の中で一人喜んだだけで、欽太の片思いが相手に通じたわけではない。それどころか、そんな心の中が彼女の前で、ついそぶりに出てしまわないかと、かえって萎縮してしまい、これまで欽太は、まるで知らない女のように、彼女の方をなるべく見ないように、目が合っても知らんふりするようにした。それというのも、学校一の美少女に、自分のようなとりえのない男が、ひそかにほれているというだけでも、それを考えると、別に人に知れたわけではないのに、羞恥で顔が赤くなるのだった。

<邪悪な目>の持ち主になったおかげで、欽太はおのれのひそかな恋にも、がぜん自信に似たものを覚えだした。彼女が欽太を特別の目で見えるようになったというのではない。それどころか、欽太を気味悪がるクラスメートにまじって、はっきりと嫌悪のようなものが、彼女の表情に浮かぶのを、一、二度見た。欽太ははじめ悲しかったが、よく考えてみると、彼女が嫌悪であれ何であれ、自分に関心の眼を向けたのは、これまでなかったことなのだ。恐れられ、嫌われるにせよ、少なくとも自分は今は、昔のように取るに足りない空気のような存在ではなくなっているのだ。欽太は嬉しかった。にたりと、いやな笑いを心の中でもらした。彼女を恐がらせること、ひよっとして、これも一種の愛の表現ではないだろうか。

心に自信はできたものの、さて欽太はどう一步を踏み出したらいいものか、まだ決断がつかなかった。できたら、彼女を自分の目の中に呑みこんでしまいたかった。自分一人のものとして、かごの中の鳥のように飼ってみたかった。だがそうすると、これまで目の中に呑みこんだ者たちとも一緒になることになり、自分の目の中とはいえ、彼女と一緒に暮らすであろう彼らがねたましくも思われた。自分はせいぜい、鏡に映して眺めるだけなのに。そして、あいつらのことだ

から、どんなわるさをしかけるか知れたものではない。では、どうしたらいいだろう。目の中の彼らを退治する方法は、ないものだろうか。

目の中の“彼ら”は、電信柱にすがって、どうにか生き長らえているらしい。時々、目薬の池に釣糸のようなものを垂らしているので、どうやら食べ物がまるでないわけではなさそうだ。そういう魚たちが、いつ欽太の目に跳びこんだものか、またもとから棲息していたものか、それに鏡には映らないずっと奥には、乾いた土地もあるようだ。この世界ほどではなさそうだが、結構住むに不自由しないのではないか。欽太は自分で入って確かめるわけにはいかなかったが、自分の特異な才能に気づかない前に、いつの間にか入りこんでいたらしい、いろいろながらくたを想像することができた。そういうものを一度、一切合切、どこかへ片づけてしまうわけにはいかないだろうか。

欽太は、ノアの洪水の話を思い浮かべた。世界中が大雨と、洪水に吞まれてしまう。その波の上を、一艘の方舟（はこぶね）が・・・その中にはノアの一族と、この世のもろもろの動物たちがひと番（つがい）ずつ・・・ではなく、もちろん彼女が。思い立つと、欽太は庭の草花に水をやるホースを取ってきて、水道の蛇口につないだ。左目の前にかまえて、コックをいっぱいひねった。勢いよくとび出す水は、一滴もこぼれないで、欽太の目の世界へ流れこんでいく。“彼ら”が何ヶ月も何年も、戻ってこれない遠くまで、彼らを押し流してしまうのだ!

欽太は目の中をのぞいた。満々と水をたたえた海が、そこに広がっていた。波風ひとつ立たない。欽太は満足した。翌日、もう一度のぞいてみた。同じく波風立たない、大海原。その翌日、もう一度のぞいてから、欽太は決心した。欽太は港へ出かけていった。外国航路の大きな船を見た。タンカーを見た。フェリーを見た。しかし、欽太がもっとも気に入ったのは、港のはずれにつながれていた、黄色く塗られた瀟洒なヨットだった。欽太は転んだふりをして、左目をヨットのかどに打ちつけた。

さて、次にいよいよ“えもの”をとらえる番である。欽太は、彼女にどうやって自分の左目をなぐらせようかと、策をめぐらせた。自分の方からぶつければわけではないのだが、あまりフェアではないような気がする。彼女の方から進んで入ってきてもらいたい。そんなことを考えながら、実行は翌日にして、欽太はその晩は、楽しい期待に胸を躍らせて、寝についた。

すると、いくばくも眠らないうちに、妹にゆり起こされた。起こしたのが妹だと分かると、欽太は狂犬のように吠えかかった。

「うるせえなあ。なんだってんだよ」

「欽兄ちゃん、すごく歯ぎしりしてたから、母ちゃん、起こしてこいって」

「ちえっ！」

するとなんだか妙な音が、欽太の身の回りで起こった。どこかで風が起こって、そのうなり声と、それにつれて物がぎしぎしと鳴っているようである。

「あら、まだ歯ぎしりしてる」

「ばか、これが歯ぎしりか」

すると何を見たのか、妹ははっとしたようである。

「欽兄ちゃん目……」

「目がどうかしたか……」

はっとして手をやると、眼帯はない。

「舟が、舟が見える！」

欽太はあわてて手鏡をとった。この頃は、いつも手もとに用意しておくのだ。左目の中には、昼間失敬してきたヨットが、ありありと浮かんでいた。目の世界に風が出てきたらしく、波の間でゆれている。

5、目に入れても痛くないほど……

翌日、欽太は放課後の来るのが待ち遠しかった。休み時間に、隙をみて彼女に紙片を手渡していた。クラスメートに見られないとも限らない、実に大胆なことだったが、あっさりできたのには、欽太自身意外だった。そして、その内容たるや……。彼女はすばやく目を通すと、たちまちビリビリに引き裂いてしまった。欽太の方をあきれたような、軽蔑した目でにらんだ。

欽太は平気だった。彼女は指定した場所に待つだろうと、確信した。何よりも、担任教師に訴えたりしないのがその証拠だ。下校する彼女の姿を追って、欽太はほくそ笑んだ。級友と連れだって歩いていくあとを、欽太はさりげなく距離をおいてついていった。彼女が欽太を意識しているのが、背中に感じられた。

一人になると、彼女は欽太を無視して、怒りのかたまりのように早足になった。と、くるりと振り向くと、欽太の方をにらんで、一、二歩ふみだした。欽太は自分でも信じられない自信が、ほとんど笑いたいくらいの気持ちにさせているのを、快く思った。彼女はまるで、手のひらの中の小鳥ではないか。欽太は悠然と、ほとんどほほ笑まんばかりに、自分を迎える女の方に歩みを進めた。

「欽太君、あなた。それでも中学生。よくもあんないやらしい……」

彼女は怒りと羞恥のために、先がつづかなかった。そのほのかに紅潮して、こわばった頬を、欽太はこの上なく美しいと思った。

「ほんとうなんです。悪いやつがいて、美耶子さんの入浴中のポラロイド写真をこっそり撮ったのです。それを僕が取りあげて持っています。それで返そうと思って……」

「早く返して！」

「いま返します。でも、まだ持ってるやつがいるんです」

欽太が手をポケットに突っこんだまま、なかなか出そうとしないので、彼女は疑わしそうな目つきになった。

「どうでしょう。そいつも僕が取り返してあげましょうか」

「うそつき！」

「うそだと思いますか」

欽太は手を出しそうにして、また引っこめた。

「先生に言いつけるから」

「ほんとに？」

欽太は、薄く涙を浮かべた彼女のまなこを、面白そうにのぞいた。ここで泣き出されてはまずいなど思った。人目もある。

「ねえ、写真は返すから、僕の話も聞いてもらいたいんだ。ここじゃちょっとまずいなあ。こっちへ来てくれる」

欽太は裏通りの方へすたすた入っていった。彼女のついてくることを確信して。仔細らしく、ポケットの中の指を動かしながら。

彼女はついてきた。はじめ帰るようなそぶりを見せ、決然と欽太のあとを追った。欽太に追いつくと、涙声で嘆願した。

「ねえ、お願いよ、欽太君。それこっちにちょうだい。お礼はするから」

「返しますよ、絶対に・・・」

「じゃ、今すぐ・・・」

欽太は足を止めた。自分の長い間片思いの対象であった美少女を、あらためて見直した。こんなことが、ちょっと前まで考えられたろうか。言葉をかわすことはおろか、目を合わせることも夢であったのに。何がいけなかったかといえば、欽太に自信がなかったことだ。自信さえあれば、今このように、どんな美女だって自分の前に哀願してくるのだ。欽太は思わず、こらえきれずに幸福の笑みをもらした。それをどう取ったものか、しかし彼女の方は表情をいっそう硬くした。

「僕の方からもお願いがあるんです、美耶子さん」

欽太は半ば夢の中の人のように言った。

「実は僕、ヨットを一艘持ってるんです。そのヨットに美耶子さんを招待したいんです」

彼女は、欽太の言うことが分からないような、怪訝な顔をした。

「信じないんですね。本物のヨットなんです。黄色い船体に、もう帆を張るばかりのやつが」

「欽太君、あなたおかしいんじゃない・・・」

彼女の目の中の不安は恐怖に変わっていくようだった。狂人を前にした時のような・・・。

「わたし帰るわ」

ふり向こうとした彼女のそでを、欽太はすばやくとらえた。

「写真、写真はいらないの」

「あるなら早く出してよ・・・」

「いいよ・・・」

欽太はゆっくりとポケットから手を抜いた。握った手を、彼女の顔の前で広げて見せた。

「やっぱり嘘だったのね!」

彼女は身を振りほどこうとするが、欽太は手首をとらえて離さない。

「ねえ、僕をなぐって下さい。こんな卑怯なことをした僕を。腹が立つでしょう。口惜しいでしょう」

欽太は眼帯を外した。

「さあ、僕の顔をはたいていいですよ」

彼女は逃げ去ろうとしたが、ふと欽太の左目を見て、逆らうのをやめた。

「欽太君の目って・・・」

欽太が眼帯をつけたしてから、欽太の“うわさ”の目をまじまじと見るのは、彼女は初めてだった。彼女は凍りついたように立ちすくんでしまった。その面に、みるみる驚きの表情が広がった。

「ヨットが! 黄色いヨットが!・・・」

6、ことは大目に

欽太は、彼女が餓え死にしないように、時々食糧を目の中へ放りこんだ。水に浮いたそれらの包みを、彼女は鉤のついた長い棒で拾いあげているようだった。彼女はヨットのあつかい方を知らなかったが、水はたいてい鏡のようで、明るい所でのぞくと、舟影がくっきり映っていた。欽太はめずらしい生き物を手に入れたように、しょっちゅう鏡を通して、彼女とあいびきしていたが、やがて退屈を覚えだした。

なんだって自分の眼中とはいえ、自分の手の届かない所に彼女を閉じこめてしまったのか。ただ見るだけで、さわること、話すこともできない。欽太は彼女の手首をつかんだ時の、柔らかい感触がいつまでも残っていた。自分も、できればわが目の中に跳びこんで、あのヨットの上で暮らしたかった。それに、彼女は一人ぼっちで、ずいぶん寂しくもあろうと考えた。

そこで、自分の秘密にどうやら感づきだしたらしい、妹のトン子を、この際彼女の連れにと、“あんちゃんのいる所”へ送りこんだ。

妹の失踪は母親を悲しませ、半狂乱にしたが、欽太は知らぬ顔をしていた。学校では、ひそかな噂が立っていた。美耶子がいなくなる前に、欽太と話しているところを目撃した級友が、その噂の出所だった。欽太が例の<目>で、彼女をどうにかしてしまっただけに違いないというのだ。大人たちは本気にしなかったが、一応欽太も、彼女の失踪については尋ねられた。

クラスでは、欽太をいよいよ敬遠するようになった。女子たちがひそひそ話しているところへ、欽太が通ると、悲鳴をあげて逃げていった。欽太は、いつか次の“えもの”を物色している自分に気づいた。

男子どもも、欽太を恐がって近寄らなくなったが、中にはかえって欽太に媚を売るものも出て

きた。欽太の威力に与ろうと、かつて欽太がクラスのモサにとり入ったように、欽太の機嫌を取るのだった。で、いつの間にか欽太は、いつでも二、三人のそうした連中を、金魚のフンのように従えるようになった。

欽太が通ると、ほかのクラスの連中はおろか、上級生まで避けるようになった。もし、ガンをつけたとあって、喧嘩を売るような者があれば、大人であっても、欽太が眼帯を外した途端に、青くなって逃げていった。欽太の左目は、誰も長く直視できなかった。見ていると、床屋の渦巻のように目がくらくらして、落ちこんでいきそうになった。まるで、天文学者の探しているブラック・ホールが、そこに出現したかのようだった。

学校中の美少女がつぎつぎと消えていくので、さすがに騒ぎは大きくなった。“変質者”の仕業ということになって、学校の行き帰りには、よく警官の姿が見られるようになった。欽太はへっちゃらだった。からかってやりたかったが、もし間違っただけで目の中に呑みこんでしまったりすると、女ばかりの世界に、狼を送りこむことになる。それでなくても、小さなヨットは、もう定員オーバー気味なのである。――もう一隻、調達しなけりゃいけないな……。

失踪事件で誰もが落ちつかなかったが、学期末の試験に入った。欽太はおのれの“異能”を発見してからは、勉強などはちゃんちゃら可笑しかった。授業時間に抜け出して、仲間と校外をぶらついた。勉強などは歯牙にもかけない連中であつたが、さすがに試験の期間が近づくと、妙に神経質になった。

「ちえっ！学校なんか消えちまえばなあ……」

一人が言った。

「おい、試験用紙盗み出そうか！」

もう一人が言った。

「よせ、よせ、白紙で出そうぜ」

「カンニングだよ。xxx甘いからな。あいつ、目が悪いのに、気取って眼鏡かけないんだよ。もう、全員だぜ、あの先公のときは」

「xxx怖い。消しゴムも拾えねえの」

「そこへいくと、欽太さんなんか、目がおよろしいから……」

もう誰も欽太のことをデメキンと呼ぶ者はいない。タブーとなっている欽太の目のことを言ったので、みんなはハツとした。欽太はしかし、さりげない調子で、

「学校がなけりゃいいんだな……学校が」

ひとり言のようにも、念を押しているようにも。

翌朝、ワルどもが登校すると、学校はみごと消えていた。用務員夫婦と、娘の小学生もろともに……。

校舎を呑みこんだ時から、欽太の目に異常が起きたようだった（もっとも、これまで異常でなかったとは言わないが）。一口に言えば、胃袋が空腹を覚えるように、目に貪婪さが加わったことだ。始終ものを呑みこみたがっているような、いらだたしいかゆみを、左目に覚えるようになった。初め、あまり異物を眼に入れたため、結膜炎でも起こしたのかと、真剣に眼科医へ出かけていくことを考えた。目薬をさしても、なにしろ底なしの井戸のようなものに、利き目があるはずがない。

そうこうするうちに、到頭かつ見開いたまま、左目は閉じなくなってしまった。まばたき一つしない。もう眼帯も無意味だった。目の上にかぶせただけで、吸いこまれてしまう。欽太が眼帯なしで歩いているのを見て、消えた校舎の跡に集まっていた生徒たちは、初め物珍しさにむらがりより、ついで不吉なものをうっかり見てしまったように、あわてて逃げ去った。

欽太はいよいよ烈しい目の欲望を覚えた。誰でも何でもよい、あたりかまわず呑みこみたいくらいだった。欽太が＜邪悪な目＞でにらむと、まわりの者らは悲鳴をあげて逃げ回った。好んで飛びこんでくる者はあるまい。追いかけたところで、ますます大騒ぎになるだけだ。

欽太は檻の中から、肉づきの良い人間どもを見て舌なめずりする、無力な飢えた猛獣のようないらだちを覚えた。欽太のまわりを遠巻きにして、人垣の輪ができた。一体どういう騒ぎかと、消えた校舎はひとまずおいて、教師らが欽太に近寄り、たちまちいくじなく逃げていった。逃げ遅れた一人に、欽太は狼のように襲いかかった。

獲物が目を通りぬけた快感に、欽太はたちまち我を忘れてしまった。あとは大混乱であった。欽太は悪鬼のように、逃げ回る学友たちの間を走り回った。欽太の目は貪婪にむさぼった。貪ればむさぼるほど、目の欲望は増していった。終いに、欽太は接触しないでも、ゴルゴンのようにひとにらみするだけで、呑みこむコツを体得した。そのあとは、ことはテキパキと片がついた。人影はみるみる薄くなってゆき、三十分もすると、ガランとした校庭と校舎の跡には、動くもの一つ、目をさえぎるもの一つ見つからなかった。

一息つく間もなく、欽太は市街へとくりだしていった。もはや自分の意志ではなく、目の欲望によって動かされている欽太だった。欽太の前に道はなかった。欽太のあとに道はできた。欽太のあとに、物ひとつない荒廃が広がっていた。瓦屋根の家々、コンクリートのビルディング、電柱、車、電車、飛行機、そして人はもちろん、生きとし生けるもの、動物、植物、雑草にいたるまで、一一目につくものは何でも、欽太の目は見のがさなかった。道端の石ころ、舗道のアスファルト、街路樹、飛びたつ雀、落葉・・・いっさいがっさいが、欽太の目の中に移住した。

見わたすかぎり、一物とて目に映らない平坦な大地が広がっていた。山のないこの地方であったが、西の地平に浮かぶ遠い山並も、欽太のまなこは、容赦なく見のがさなかった。目をさえぎるものが何一つなくなった時、欽太の目の貪欲はおさまった。欽太はわれに返った。あつけにとられて、わが目を（おそまきながら）疑った。これだけの世界を、おいらの目は呑みこんでしま

ったというのか。

世界が滅んだばかりではない。これから自分はどうやって生きていいんだ。食物も水もない。川の水まで、目は飲みほしてしまった。欽太は空を見上げた。青空に雲が浮かび、たちまち消えた。もしまぶしさがなかったら、太陽まで目は呑みこんでしまったろう。

しかし、せめてこの地上が残っただけでも合わせだった。欽太は思い直そうとした。しかし、土くれの他には何もない地上で、しかも一人ぼっちで、どう生きていけるのだ。みんなこのおいらの目が悪いのだ。欽太は泣きたかった。しかし、目はその飲みこんだ川水を、吐きだそうとはしなかった。どこか物の見える所まで、歩いていこうか。いや、同じことだ。おいらの目は、どこまでも目に映るものがあるかぎり、そこに達する前に呑みこんでしまうだろう。これ以上破壊を広げてはならない。

とはいうものの、欽太の寂しさとパニックは、こういう良心的な考えを、いつまでも保たせはしなかった。欽太は走りだした。むやみやたらに、何もない大地を走った。なにか物が遠くに見えてきそうになると、たちまちもやもやと揺れて消え失せる。鳥が飛んでくれば、欽太の目はパチンコのように打ち落としてしまう。虚無の穴へ！

8、弱り目にたたり目

欽太はおよそ一時間も、右へ走り、左へ走りしたあげく、疲れはてて大地へ突っぷした。心は泣いているのだが、貪婪なまなこは、あらゆるものを呑みこんで、涙ひとすじ出そうとしない。泣きながら、この大地だけはなぜ消えてなくなるまいのだろうと、科学的な好奇心が芽生えてきた。考えれば不思議なことではないか。

欽太は腕組みして、大地にあぐらをかいた。太陽さえ呑みこみかねない、このおいらの＜邪悪な目＞が、地球ひとつ呑みこめないなんて。考えてみると、欽太の目は物の形をとらえた瞬間に、そのものを呑みこんでいた。あるいは、そのものの一部分と衝突した時に、そのもの全体を呑みこんでいた。今この大地の広がりやをながめても、一向に目に“入って”こないのは、実は本当の形をとらえていないからなのでは・・・。

大地が平坦だと考えているかぎり、そう見えるかぎり、地球は欽太の目には入ってこない。欽太は今、やけっぱちな気持ちになっていた。こんな土くればかりの地球に生きていたとて、何の役にたとう。いっそのこと……。それはなんと壮大な自殺ではないか。欽太は立ちあがった。足もとの地面を見た。地面はぐんぐん近づいてきた。地面は目に余るほどの大きさになった。地面は欽太の目に“ふれ”た……。

欽太は真暗な空間に漂っていた。最初はそう真暗でもなかったのだ。目も眩むばかりの満天の星が、一瞬見えたのだ。そう、見なければよかったのだが、見てしまったので、欽太の目の世界に星々は引っこしてしまった。あとは暗黒の空間だった。太陽だけが一つ燃えていたが、まぶし

いおかげで、欽太はそちらを見ないですんだ。欽太は、地球の代わりに太陽を回っていた。

こんな羽目になろうとは、かすかに予感しないでもなかったが、弱り目にたたり目とはこのことではないか。欽太にはもう、最後の方法しか残されていなかった。このままじりじりと太陽にあぶられている生存に、何の意味があろう。欽太の逃げ道は“ひとつ”しかない……。

欽太はしかし、その方法をとる前に、太陽の方をちらっと見た。もし太陽だけを置き去りにしていくと、あちらの世界では明かりがなくて困るのではないか。それにお土産を持っていけば、“彼ら”も少しは怒りをやわらげるだろう。欽太はまぶしいのを我慢して、熱球をにらんだ。

暗黒とはこんなに暗いものなのか。どこに手があるのか、足があるのかも分からない。たよりない。魂だけになって、あの世をさまよっているような。欽太は悪い夢でも見ているように身震いした。心の奥底から身震いした。なんということだ。結局、目玉の世界に“彼ら”を閉じこめたつもりでいたのが、自分だけが締めだされてしまい、一人ぼっちだ。この世の何もかもが“向こう”にあるのだから、“彼ら”は何の不自由もないのに、その世界の持ち主である自分だけが、その世界からホサれている。

欽太はたまらなくなつて、自分の右手らしいものをこぶしに握りしめ、自分の左目のあるあたりへ突きだした。ところが闇の中では、こんなことも意のままにならないらしく、みごと外れて右目をたたいていた。一瞬明るくなって、星がまたたいたが、たちまち左目が呑みこんでしまった。欽太はパニックに襲われた。めったやたらに、自分のこぶしを自分の顔を目がけてふりおろすのだが、どこをどう間違えるのか、ヘソのあたりに当たったりする。ああ、暗黒とはこんなにも暗いものなのか……。

9、目には目を

花火が上がった。繖形花序に開いて、流れた。涙になってしたたつた。

堅一のこぶしは痛かった。欽太はひっくり返って、左目を押さえていた。悲しいより先に、涙が勝手にわいてくる。涙腺の、物理的的刺激による、生理現象だな……。くやしいより先に、生理現象だ。泣くから悲しいんだと、どこかで聞いたような。それじゃ、涙が出れば、悲しまねばいけないんだな。

「よくも、おまえの汚らしい出目の中に、閉じこめてくれたな」

堅一が咆えていた。その後ろには、妹のトン子がいた。父もいた、母もいた。トン子は、憎たらし気なとんがり口をしている。

欽太は、学校へ出て小さくなっていた。事件などは何もなかったかのように、日々は静かに過ぎていった。欽太はその静かさが恐かった。クラスメートのさりげない目つきにビクリとした。“彼女”は以前のように、欽太の方を嫌悪であれ何であれ、一瞥すらしなかった。みんな、“

あのこと”を忘れてしまったかのようなふりをしている。

欽太は堅一になぐられただけで、誰からも仕返しされなかった。それがまた不気味だった。陰では何かを言ったり、後ろ指を差したりしているらしいのだが、面と向かって欽太にあのことを言いだす者はいなかった。それでいて、欽太は、たえずクラスメートから見られている気がしてならなかった。いや、クラスメートばかりではない。街中を歩いている、前から来た人がふと目をそらしたりすると、ああ、この人はわざと知らないふりをしたのだなど、欽太はいやな気持ちになるのだった。みんなして、どうして自分が悪いと、はっきり言ってくれないのだろう。自分は、いくらだって謝るのに。

欽太は、学校へ出るのが苦痛になった。この目の世界に暮らすのが苦痛になった。堅一は、欽太を一度なぐっただけで、あれ以来欽太の目には手出ししなくなった。欽太はそのことは嬉しいと思ったが、家族の欽太を見る目が変わってきたことに気づいた。妙によそよそしい、時には遠慮しているようなそぶりを見せるのだ。欽太はあんなことがあったのだから、当然だとは思いつつも、なんだかこれまで以上に他人扱いされてるようで、いっそ思う存分おいらをなぐってくれ、と言いたくなるのだった。だからおいらを兄弟だと思ってくれ、息子だと思ってくれ……。

学校では、もっと苦痛だった。みんなでしめしあわせて、欽太を無視しようとしているのだ。教師は欽太をまるでささなくなった。そのことは嬉しいのだが、たまに欽太が立って答えようとする、途端に騒がしいクラスが静まり返ってしまい、欽太は自分のかすかな耳鳴りさえ聞きとれるほどだった。

で、欽太は緊張のあまり答えることができなくなって、顔を赤くして坐ってしまうのだ。欽太のそばによってくる級友はいなくなった。昔からの大人しい友達も、欽太がよると、さりげなく身をかわした。女子たちは、前のように悲鳴をあげはしなかったが、欽太の席を迂回して通った。

欽太の左目はもと通りになってしまったが、欽太は今、自分自身の眼球の世界から脱け出す方法を、あれこれ考えている。

10、目の権威

<目にうつる対象は、すべて心の中にあるにすぎない。>

——ジョージ・パークレー「視覚新論」第七十七節

(「眼球宇宙」完)